

第5回高等学校改革プラン推進委員会（第一推進委員会）議事録

1 日時 平成17年8月8日（月）午前9時30分～午後0時30分

2 場所 長野県庁西庁舎 401号会議室

3 出席委員

中村 正行委員長	市川 浩一郎委員
森野 貞雄副委員長	若麻績 享則委員
青木 一委員	清水 保委員
中沢 一委員	坂口 昌夫委員
小山 元彦委員	小山 壽一委員
塚田 芳樹委員	宮本 精一委員
牧 重信委員	丸山 稔委員

4 開会

（三澤教育支援主事）

それでは時間になりましたので、よろしくお願いいたします。

本日はお忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

それでは委員長様、よろしくお願いいたします。

（中村委員長）

皆さん、おはようございます。

お集まりいただきましてありがとうございます。

第5回の推進委員会を始めさせていただきます。

本日も資料を準備していただきましたので、その説明からまずお願いしたいと思います。説明していただいた後、地域あるいは各委員の皆さんのお立場でお聞きになっている情報等ありましたら、ご紹介いただきたいと思います。

私のほうからは、長野市の教育委員会が長野市のPTA連合会の役員に、長野市立の皐月高校の改革の説明の会合を持っていただきましたので、その状況をお伝えしたいと思います。

また文書が幾つか私の手元に、高校の同窓会等から送られてきておりますので、それを紹介し、ここでの議論の参考にさせていただければと思います。

それから後ほど資料説明の所で説明があると思いますが、第1回から第4回の推進委員会での議論の内容を私のほうで項目別に分類してまとめてみました。なかなか意見が多様なので、分類と言いましてもしっかりしたものではございませんが、参考にさせていただきたいと思います。だいが議論が進んできましたので、具体的なところへそろそろ移っていったらというふうに考えておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、今日準備していただきました資料について、事務局から説明をお願いしたいと思います。

5 資料説明

高校教育課三澤教育支援主事から説明【説明内容省略】

（中村委員長）

ありがとうございました。資料は、お手元にそろっていますでしょうか。よろしいでしょうか。

ただいま説明いただきました内容について、委員の皆さんご質問等ありましたら、ご意見であってもよろしいかと思いますがいかがでしょうか。

（丸山委員）

大体前から分かってはいましたが、長野県の進路状況について、全国の順位がどうかということはいろいろ意見はあると思いますが、短期大学進学が率の順序から見るとトップレベルにあるわけですね。これについて県教委としては、背景等どのように考えていらっしゃるのかというところをちょっとお聞きしたいと思います。

分析はあるかどうかについてお聞きしたいと思います。

（中村委員長）

事務局、お願いいたします。

（柳澤教育主幹）

大変難しい問題ではあるかと思いますが、いろいろな要素が入っているかと思いますが、今、委員のご指摘のように資料にございますが、長野県の高校から卒業しての進路の中で、ひとつの選択肢として短大志向というのが、このところちょっと下がり気味ではございますが、過去からずっとそういう進路希望が多かったということでございます。

いろいろな要因があろうかと思いますが、長野県の中に四年制の大学の数が少なかったとか、つまり自分の通学圏域の中に四年制大学がないとか、そういったこともありましようし、その先のキャリア教育というようなことでの高校での進路指導というようなこと、親御さんの希望、いろいろな要素が含まれていると思いますが、これだということはないと思います。

最近では四年制大学への志向も多くなっている傾向にあるかと思っております。

（中村委員長）

丸山委員、よろしいですか。

ほかに何かございますか。

（若麻績委員）

前回、私のほうで質問させていただきました、構造改革の件と学校のありようといひますか、その質問についての答えが資料の3にあると思います。

3の構造改革特区についてとか、今のNPOが主体になっている学校の設置事業ですとか、概要はこれで分かるのですが、やはりこうなる形を追求している自治体の中で、例え

ば行政が要するにどういう補助をしてこういうものが成り立っているのか、例えば財政的にはどうなのかが、というところがお分かりになる部分があれば知りたいと思います。

特にこの第6次（特区認定）の、高等学校等における公設民営方式の容認と、千葉県野田市がそういうことを実施しているようですが、これについての財政的な面などを教えてください。

（柳澤教育主幹）

この第6次の野田市の例でございますが、今、ご質問があった中身については詳しく承知しておりませんが、今年の2月か3月に許可になったということでございまして、認可をされたということで、新設の定時制は平成19年度開校を目指して今は準備中ということとは聞いておりますが、また調査できる部分は調査してお答えできる部分があれば、ご報告したいと思っています。

（中村委員長）

よろしいですか。

ほかにございますか。

それではまた、議論の途中で結構ですので、資料説明に関してはこれで終了させていただきます。

先ほど言い忘れましたが、3名の方が所用により途中で退席されますので、ご承知おきください。

それでは委員の皆さん、それぞれの立場で地域あるいは会合でお聞きになっている、高校改革に関する情報がありましたらご紹介いただきたいと思います。私のほうで最初に長野県立高校に関する、長野市教育委員会が、長野市PTA連合会の役員に対して行った説明会の様子をお伝えしたいと思います。

7月25日、前回の推進委員会の日の夕方に、長野市PTA連合会の事務局へ長野市教育委員会の方3名が来られまして、『高校改革宣言長野市立高校が生まれ変わります』ということで、パンフレットを持っていらっやして、説明をしていただきました。

長野市立の県立高校に関しましては、この間の総合学科高校として改革するというようなことを資料としてこの委員会でも説明いただいています。その内容は変わりませんが、いきさつ等の説明がありましたので、そこをお伝えしようと思います。

長野市のPTAの役員のほうが12名、13名集まりまして、私は長野市PTA連合会の顧問という立場で参加させていただきました。もちろん説明に来られた方には、推進委員長であることは紹介しました、それを承知して説明していただきました。

県立高校は現在市立であります、建物もかなり老朽化しておりますので、高校改革に関してスタートが平成3年の3月ということです。「長野市立高校の在り方（提言）」ということで、まずスタートしております。平成12年に「県立高等学校の特色ある学校づくり及び施設づくりの検討について答申」ということで、コース制の導入がこの間に検討されております。

本格的なのは平成16年の2月ぐらいから、「長野市立高校のありかた」というのが、特色ある学校づくり研究委員会というところから提言がなされております。16年の8月に長

野市教育委員会から「長野市立高等学校改革モデルプラン」というのが出されました。今年の6月に「高校改革宣言」が出されました。この辺のパンフレットは、コピーをして皆さんのところに多分配っていただいていると思います。

平成20年の4月から、新しい高校としてスタートしたいということです。建物の建て替えもしますが、建て替えは現地でという計画になっているということです。この辺はまだ検討するのかどうか、ちょっと定かではありませんが、今のところは現地で建て替えを予定しているそうです。場所は当然長野市内でしょうけれど、現地というのが今のところの予定です。

当初中高一貫校を計画していましたが、今回見送ったということです。その理由はすぐには取り組めないだろうということで、もうこれで検討をやめるということではなくて、まだこれから取り組む可能性もあるという説明でした。

具体的なところは、単位制の総合学科を導入し、2学期制であること。総合学科の特徴的な、産業社会と人間という科目を開設する。市内全域がキャンパスであるという立場を取ります。ですから市内にあります大学、短大と連携したり、あるいは地域の団体、国際交流の団体等々、授業を行う、あるいはそのサポートをしていただくという計画がされております。これが、お配りいただいたパンフレットにも掲載されています。

国際・人文科学系列では長野国際親善クラブから支援をいただく予定であることや、高大連携ということで高校大学との連携。今のところ具体的なものではないらしいですが、協議をさせていただいている教育機関としては、清泉女学院大学、信州大学教育学部、長野工業高等専門学校などがあるようです。

それからさらに長野県レクリエーション協会、それからエムウェーブとも支援協力を予定しているということです。後は、長野県介護福祉会、NPO信越ネットワーク長野等、今後さらにその辺は増やしていくということだと思います。長野市内全域をキャンパスにしていきたいということです。それから学校外における学修による単位認定、それから地域の教育力の導入ということを特徴としています。

このような説明がありまして、市のPTA連合会の役員のほうからは、開校を1年ずらしてもうちょっと検討すべきではないかという慎重論がありました。平成19年のあたりの募集に関して、まだあいまいな面がありましたので、その辺も再検討をお願いしたところがあります。

時間が1時間程度で、簡単な説明と簡単な討論ということで、このくらいの説明でございました。長野市のPTAの役員のほうからは、具体的にこういうことを考えていただきたいというような提案もありました。立地場所を変更したほうがいいのかという提案もありました。

以上です。何かご質問等ありますか。

この推進委員会では、総合学科高校をどこに配置したらよいかということが議論になっていますが、この件に関係することだと思います。

よろしいですか。

それともう1点、私のところに推進委員長あてに文書が来るのですが、ひとつ大きなものが送られてきましたので、紹介しておきたいと思います。地域の方の意見、あるいは各学校の意見というふうにとらえて、参考にさせていただければというふうに思います。

これは長野市の地図ですね。(会場に掲示)昭文社発行の地図で、多分拡大コピーされているのだと思いますが、そこにピンクの色が付いているのが高校の配置です。これは長野南高校の同窓会の方から送られてきたもので、南高校のところが、黄色で色分けされて、それと周辺の中学校在色付けされています。こちらのほうの中学校は色が塗ってありません。幾つか、抜けております。

これが送られてきた鑑(かがみ)のところには、「ご参考までに」という一文しか載っていませんでしたので、参考にしていただければと思います。なお、これは配置の魅力づくりですかね。ここがなくなると、この辺が空白地帯になるよということをおっしゃりたいというふうに解釈ができますが、空間的な魅力もそうなんですが、交通の便あるいは人口の集中の度合い、中学生の配置等も、またここに色を塗らないと総合的には判断できないのかなと思います。

なお、白地図がもう1枚付いておりました。ここに絵を描いてくれということかもしれません。ご紹介しておきます。

あとは長野南高同窓会会長の西澤さんから皆さん方に資料がいつていると思います。長野市の北部に、公立の高等学校が集中して5校ある。ここのネットワークを使って、先生方に兼任してもらおうというようなことをするほうがいいのかという提案が送られて来ております。確かに北部にこういうふうに高校が集中しているので、直線的につなぐことができますよというものが送られて来ております。ご参考までにお願いします。

何か、今の長野南高校同窓会からの文書に関するご質問等ありましたらお願いします。

(森野副委員長)

例えば隣接校で教員を共有できないでしょうか、これは小規模校や地域校の存続というような意味からも、考えていただきたいかなと思うのですが、高等学校においては0.5という人員の配置というものはできないのかどうかということをお聞きしたいわけでございます。

ここでも言うておりますように、隣接あるいは近接の場合は(教員の共有は)できると私は思っています。以前にも飯山北校の校長先生のほうから「6学級が理想ですよ」というお話がございました。「2学級になりますと人員配置が難しいですよ。」というお話がございました。そんなことを考えますと、やはり近くの学校であるならば、1日はA校へ行って、2日目はB校ということが週の中で可能ではないかなと思います。

人間関係も、そこには当然生じるかと思いますが、そこはやはり高校間の妙であります。そこは是正できるかなと思います。だから人件費で、そういった財政面だけで教育というのは流れるものではないと思います。大きく、人間的な立場で、こういうところをお考えいただければありがたいかなと思っております。

(中村委員長)

はい、ありがとうございました。

今の人員配置について、事務局のほうからコメントをいただきたいと思います。

(篠原教育幹)

森野副委員長のおっしゃるとおりで、現在でも高等学校では教科によっては0.5という配置で、兼務という言葉を使っておりますが、兼務で隣同士の学校あるいはもう少し離れたところも通勤の範囲であれば、先ほどおっしゃったように、日を変えればできるということでございます。近いところであれば、あるいは午前中片方の学校、午後片方の学校ということとはできます。

現在は、特に少人数の教科、科目。例えば芸術関係であるとか、あるいは家庭科の関係であるとか、そういったところが中心なのですが、ひとつ注意をしておかなければいけないのは、兼務があまりにも多くなりますと、これは時間割編成上非常に各学校とも苦しいということもございます。

従ってある程度のバランスというものは必要になるでしょうし、それから兼務という場合にはなかなかクラス担任が持ちづらいということがございます。当然毎日顔を合わせていなければいけないということがありますので、そんなところが若干条件としては出てくるということでございます。

(中村委員長)

今、私のほうから紹介しましたが、ほかに何か推進委員会の議論に参考になることがありましたら、ご紹介いただきたいと思います。地域の情報、あるいは高校の情報、各団体の情報等でお話しただけことがあれば議論の参考にしていきたいのでお願いします。

(丸山委員)

一言ある方は出していただけませんか。私は直接あるわけではありませんが、私が所属している団体や議会等ではいろいろな話はしていますし、高校生とも話しています。

ちょっと要望といいますか、県の教育委員会や教育委員長や、あるいは議会に対していろいろな地域の団体、学校や生徒やPTAや同窓会とか、たくさんの陳情や請願やさまざまなものが来ていると思います。新聞で知るわけですが、一応切り抜きはしているのです。でもまとめてほしいというか、今、どんなところにどんな動きがあるのかということについては、新聞の情報はもちろん取っていますが、正式に教育委員会にはこういうのが来ましたと。県議会にはこういうのが来ているというのは、きちんと一覧表が何かで示していただけましたか。

どんどん来ているので、どこかで切らなければいけないと思いますが、そういうのはぜひ知りたいと思います。どういうところでどんな要望があるのか、請願があるのかということについては、我々は知っておく必要があるかと思います。

お願いします。

(中村委員長)

はい。ほかに、何かありますか。

(小山(元)委員)

飯水岳北のほうでの動きを紹介したいと思います。

飯山、下水内郡、下高井郡、高社から北のところを岳北地区と言っておりますが、その飯山市、栄村、野沢温泉村、木島平村、この4つの市村が、今まで準備してまいりまして準備会をやり、今日の午後実は飯山市に集まりまして、『飯水岳北地区高校の将来を考える会』という、これは仮称でございますけれども、それで大事に地域住民を上げながら各種団体、各市村の長、議会、PTA、学校関係、すべての方々にお集まりいただいて、約60人集まって、大事に考えていきたいということで、今日スタートするのです。

またそういう各地で立ち上げております、大事な地域、大人の考えておられる会にしていきたいと、それを反映させながら一緒にお考えいただければなと。

以上、紹介です。

(中村委員長)

はい、ありがとうございます。またご報告、お願いしたいと思います。

そのほかに何かありますか。

(坂口委員)

中学校の現場でも、この高校改革プラン、特に統廃合という問題については、非常に現場でもこれからの進路指導に当たって苦慮する状況でございます。そんな中で今、丸山委員さんがお話ししたように、さまざまな議会とか、あるいは同窓会関係で、陳情をとおして、ともすると反対の何とか白紙撤回でという声が、情報のいろいろな紙面をにぎわすわけではありますが、どうも感情的な部分にいつまってしまうのではないかと思います。中学校側とすれば、そういうところを非常に危惧(きぐ)している部分であって、それでもこの改革のテンポは緩やかにしていけないのか、あるいは一気に進めていくのか、非常にその辺が心配な部分であります。

どうしても改革というのは必要であり、これはもう学校の数、いろいろな観点からも必要なわけでもありますけれども、中学校側としても「そりゃもうやむを得ないだろう」と思いますが、これからこの推進委員会も含めて、結論を本当に急ぐのか。もう少し時間をかけていくのか。特に中学生の声、アンケート等ありますが、あるいは具体的に高校名が出ている学校の高校生の声からすれば、切り捨てられるという、そういう意識を持たせたときに、本当にこれから子どもたちにとって、この高校改革が夢と希望の持てるものになっていくのか。

やはり、いつまでというところを、このまま行くのかどうか、その辺りは県のほうでも若干年度内にはという声が聞こえているわけではありますが、何とかもう少しゆっくりといけないものかどうか、中学校とすればそんな希望が、声が多いかなと思っております。

もうひとつは、中高一貫について、若干地域のよっては声が上がってきていると。しかしこれは県の小中の校長会の代表者の会である校長さんから話が出たわけではありますが、県とすればそういうことは、今は考えていないというお返事を、その場ではいただいたわけですが、その辺はどうなっているのかなという声がひとつ出てきております。そういったときに中高ということになれば、義務教育課も当然かかわっていく問題になるわけです。

ですから県教委として、事務局のほうで、高校教育課なり義務教育課、そういったところの話し合い、あるいは連携ということについては、この高校改革プランについてどんなふうになっているのか、様子がよく見えないと、そんな不安も聞こえてきております。いずれにしろ子どもたちのことを考えると、やらなければいけない改革であるけれども、結論を急ぐのか、もう少しゆったりとしたテンポで進めないのか、もし再度お聞かせいただければありがたいなと思います。

以上です。

（中村委員長）

はい、これは事務局というか、この推進委員会としての取り組みはということですか。

（坂口委員）

ただ、そういった魅力で中高一貫というのはほとんど話題になっていないという話で、ただある地域ではちょっとそんなような声もう出てきているというようなことで、現場の校長さんとすれば早くというような、そういう声が出ているということでございます。

その辺り、もしこの場でも事務局のお考えが中高一貫についてあるのかないのかということですが。

（中村委員長）

義務（小中学校）との議論をすることについて、何かお考えがあるのかどうか、事務局のほうへ伺います。

（柳澤教育主幹）

今、質問が2つありまして、中高一貫のことは後ほどお話しますが、スケジュールの問題のお話でしたが、第1回の推進委員会のときに、検討依頼事項と合わせまして、推進委員会でのスケジュールのお願いもしたところでございます。

その中で、ひとつの目安として12月ごろに報告をということ、そしてそれを基にしながら県教育委員会として実施計画を今年度末をめどに策定をしたいと、こうすることで第1回目のときにお示したスケジュール、そのことで今、変わっておりませんのでそれで進めていきたいと思っております。

それから中高一貫教育につきましては、前々回でしたか、お話がこの場でも出たかと思いますが、最終報告書にございますように中高一貫教育校というのが、ひとつのアイデアとして最終報告書にも出ております。その中で、全国でもいろいろな例が見られるわけですが、報告書にありますように、教育課程の編成とか、あるいは教員・生徒間の交流の連携を深めていくと、こういった形での連携型の中高一貫教育校の設置というようなことで、当面は考えていったらというようなことでございます。

従って全くこの中高一貫は、今回の改革プランで考えていないということではございません。

以上でございます。

(中村委員長)

はい、ありがとうございました。

(小山(壽)委員)

今の事務局の回答ですが、私は前回中高一貫について質問をして吉江課長が連携型などの中に併設型も含まれていると、こういう回答をいただいておりますので、その点ご確認をいただきたいと思います。

(中村委員長)

事務局、それについてよろしいでしょうか。

それでは、ほかにご質問ありませんか。

なければ、議事のほうに移っていきたいと思いますが、よろしいですか。

今日の議題、開催通知には魅力ある高等学校づくり、それから県立高等学校再編整備に関する事、総合学科および多部制・単位制高校配置に関する事項ということで、我々の委員会に任された議事なのですが、過去4回にわたって議論していただきました。それをまとめたのが、先ほどの資料説明であった、推進委員会にて出された意見の抜粋です。これは私が項目別にまとめました。

項目の立て方等、異論もあろうかと思いますが、なかなかお一人の意見を分類するわけにはいかない面もありまして、重複して挙げなければいけないのですが、どこかひとつに挙げさせていただきました。中には議論の途中で出たことを分解してしまっているのも、意見として違うことになってしまっているかもしれません。そういった点はお許しいただいて、概要として見ていただきたいと思います。

推進委員会の進め方の項目の最後から2つ目の「・」のところ。「議論のスピードが遅い」、「中身を検討していきたい」というようなご意見もあります。

議論のスピードが遅いかどうか、私はそうは思いませんが、慎重に深く議論していくには、少し時間を置くことも必要だと考えますが、確かに中身を検討しなければいけないと思います。この中身というのは、やはり具体的な候補案が挙がってきておりますので、それに対して議論していくこともひとつかなと思います。

これまで4回にわたって、システムとしての魅力づくりということで、大枠のところが大分深まった、議論が深まったというふうには私は考えています。ですので、そろそろ具体的なものを議論していきたいというふうに思います。

また候補案という項目の中にも、具体的なものを出して議論せざるを得ないので、候補名が出たことはありがたいというご意見もいただいておりますので、この委員会の目的であるところを、今回進めていきたいと思います。

なかなか取っ掛かりが難しいと思いますので、今、項目のまとめを見ますと、魅力づくりのところも幾つかの項目にわたってまとめたところ以外にも意見が出されていますが、総合学科高校に関するものと、多部制・単位制高校に関するところが、かなりたくさんの意見を出していただきました。

この辺を今、県教委から示されている候補案に関して、もう少し詳しいいきさつ、今の候補案がどうして出てきたのか、その辺を含めてもしお話しただけことがあれば、事

務局のほうに詳しい説明をいただいて、それでこの委員会としましても、こういう案のほうをもっと魅力が増すのではないか、あるいは、新しい魅力がこうしたら得られるだろうというような、あるいは生徒、生徒というのは中学生も当然含みます。これから進学する子どもたちですね。その生徒の気持ちや希望にこうしたらもっと応えられるといったようなことでご議論いただきたいと思います。ですから「こうしたら」というところが、かなり具体性を持ってくると思います。

このように進めたいのですが、よろしいでしょうか。あるいはもうちょっと全体的な議論で、この辺が足りないとかありましたらお願いします。

（丸山委員）

全体の流れでは、これでいいかと思いますが、私のほうでも資料は出しましたが、その議論の中で総合学科、多部制・単位制そのものについて、この前もどなたか出されていましたが、今のいろいろな問題点を解決する特色づくり魅力づくりになるのかという基本的な問題も、やはり合わせて議論してってもらいたいと思います。何でも総合学科や多部制・単位制をつくるという前提でということではなく、というふうにお願いしたいと思います。

まだまだ私は、かなり疑問を感じていますのでよろしくお願いします。

（中村委員長）

はい。多分そういった議論のほうが先だと思いますので、まだ総合学科と多部制・単位制についてもそうですが、こうしたシステムに関しての疑問点、今、また挙げられていますが、そっちが先かなと思いますので、その議論をしながら、今私が申し上げた方向へ行きたいというふうに思います。

ほかに何か、進め方に関しましていかがでしょうか。

先ほど、もう少しゆっくりというようなお話もありましたが、推進委員会ということでお役目をいただいている範囲内では、12月末ぐらいまでにはまとめをしていきたいというふうに考えています。

よろしいでしょうか。なかなか取っ掛かりが難しいのですが。今の総合学科のメリット、デメリットに関して、もう一度丸山委員のほうから論点を整理していただいて、また議論をしたいと思います。

（丸山委員）

先日資料を配らせていただきましたが、それは総合学科は職業高校に代わり得るかという観点で書かれています。総合学科というのは何か、非常に魅力があって人気があるというふうに言われていますが、私は長野県の場合には幸か不幸か県下に1校しかないの、ということがあると思います。

それが各地区1校ずつできるかということが、本当に大丈夫なのかなというのが一番心配です。しかもこれは前にも言いましたが、北信地区では市立皐月が先ほど委員長がお話になられたような方向に進んでいこうとしているわけで、これは我々と一緒に議論をしていくという立場ではないと思うので、それはそれで進むのだらうということになると、皐

月とこの北信地区にどこか1校ということになると、かなり近接した場所に総合学科ができるということも含めると、非常に心配なんです。

それから本質的なことでいいますと、総合学科というのは要するにいろいろな自分の進路や関心にあった科目を選んで、自分で時間割をつくって、自分の興味関心に応じて勉強していくと。しかもその中で進路も考えていくと。

その進路については、もちろん十分ケアをして、キャリア教育その他も含めて進路を考えていくという、1年のときからそういう指導をしていくということですが、実際に総合学科を幾つか見ると、頭の中で、机上で考えるといろいろな科目がいろいろそろえられるとはいえますけれども、教育条件の下で考えると、全部そろえることは無理なんです。

例えば塩尻志学館も、資料を見させていただきましたがどうですか。工業系の科目はかなり少なく、ほとんどないんじゃないですか。やっぱりその総合学科がどういう学校からスタートしたかというか、全く新しく施設等もつくるわけではなくて、どこかの学校を変えていくという方向だとしたら、もとの学校が持っている特徴といいますか、特に職業教育に関する特徴を柱にしてということになるわけです。

言葉ではいろいろな科目を自由に選択してとはいいますが、そうはなっていないということです。それから普通科の問題でもいいますと、普通科の基礎をきちんと学んで、きちんとその基礎力を付けていくという点からいっても、ほかのいろいろな選択科目もありますので、そういうのは不十分になるわけです。

だからこの前も言いましたが、全国的な流れでいえば、生徒が集まらないといって、既に総合学科をやめていこうという流れも出ているわけです。全国の例でいうと、そういう失敗例も幾つか出ているわけです。

多くの成功した例というのは、結局は進学にシフトしていくと。それはそうですよ。もともと総合学科というのは、職業高校か普通高校かということは選べないような、そういう生徒、子どもたちがいると。それはそうでしょう。そういう子たちにとってはいいという話もありましたが、結局高校へ入ってからいろいろ選んでみて、自分にあった進路を選んでいくということなんです。

そうすると結局進学準備、上の学校でやりたいことはやるということなんです。上の学校でやりたいことはやるということが基本なんですよ。そういう点でいくと、それにはまった生徒はいいけど、そうじゃない生徒はうまくいかないのではないのかというのが心配なんです。

だから結局、どういう思いを持った生徒がその地域で総合学科に集まってくるかという問題があると思うんです。それによって、かなり総合学科の性格が違ってくと思います。そういう点では、総合学科を地域ごとに1校ずつ必ずつくるということについて、私はちょっと疑問があります。

幾つか総合学科に変えてもいい、変えるようなところがあるかもしれませんが、その地域での職業教育を担ってきた職業科ですね。それから今、いろいろな学校格差がある中で、普通高校を志望する生徒が多い中で、進学をバリバリやる学校じゃないところ、あるいは進学バリバリやる学校というのは、特徴が仕方なしに現在あるわけです。

総合学科で、そういうところをきちんと生かせるようになるのか。つまり総合学科をつくった場合に、どういう生徒が集まってくるのかとか、そういう問題が残念ながら学校格

差というのがあるわけで、その中でそういうものを、どういうふうに生徒たちが行っているのかという問題を、かなり分析しないと必ずしも表面的な言葉で、総合学科はこういうこと、こういうことでいいですよと、そのとおりにはならないと思います。

本当にいい面というか、総合学科の言葉で言っているようないい面が十分に発揮できない。それはどういう生徒が集まるのかという問題や、もっと大きいのは教育条件からいって、お金の問題からいって、お金をあまりかけなくて、今ある施設を使ってということになるとしたら、それはもう本当の意味でのいい総合学科にはならないと思います。

塩尻がある程度成功しているという話は、私は全県に1校だからというふうに思います。それが大きな条件じゃないのかなと思います。そういう点では、やはり総合学科の問題というのは「いいものだから」というようなことで、簡単にそう考えていいのかなということがひとつあります。

例えば全国で中退率が、長野県の場合は塩尻は減ったということは、そういうこともあったと思います。やっぱりそういう点で、自分は目的を持って塩尻志学館を選んでいったということから、中退率が少なくなったということだと思います。だけど全国の平均でいくと非常に高いのはなぜかという、そういうところにはまらないような生徒がいるんだと。そういう点で私は考えますが、今の職業教育や普通教育、普通高校や職業高校が私はいいとも思いません。いっぱい検討しなければいけないこともあるし、生徒の多様性にあってない点もあるし、そういう点はあるから、そこを前提として今のものがないとは思いませんけれども、少なくとも今の職業教育、農・工・商を中心とした職業教育の基礎のところを、もういっぺん振り返ってきちんと基礎を、技術の基礎とかをきちんと教えるような体系に変えていくという点や、普通科も職業教育も含めて、いわゆる一般的な職業教育も含めて、普通科の中できちんと教えていくという体系を、やっぱり考え直していくという、今の普通科と職業教育というところについてもういっぺん見直しをして、そののところに特色づくりをきちっとしていくことが大事ではないかと思います。

あまり新しい学科に飛び付いていくというのは、私はあんまり賛成できない。大ざっぱにいうと、新学科で成功しているところは、私はあまりないと思います。例えば理数科とかそういうところも含めて、なかなかうまく大々的に成功したというところは、私はあまり聞きません。

長野県全体でもそうではないですか。特殊なもの、例えば音楽科というのは別として、なかなか難しいのではないかな。だから新学科をどんどんつくったり、表向きは特色をつくっているように見えますけど、本当に生徒の実態に合っているのか。

この前第1回目のときにどなたかおっしゃいましたが、改革プランのところでは多様化というのが大きな理由になっていると。でも、生徒の多様化とはどうとらえたらいいのかというところは、もう少し議論を深めなければいけないなと思います。

そういう点では繰り返しですが、今の職業教育、あるいは普通教育、普通高校、職業高校の基本のところをきちんともういっぺん見直して、それを現場でも努力しなければいけないし、地域と連携して努力しなければいけないと。

そのためには今、いろいろな特色づくり、魅力づくりは現場ではやっているわけです。生徒がいろいろ変わってきた、多様化になってきたということも含めて、コース制も含めてやっているわけです。そののところをもっともっと発展させる。行政的な援助もしなが

ら、あるいは地域との連携も深めながら、そこを発展させていくという視点を、きちんと押さえないといけないのではないかというふうに思います。

最後ですが、もうひとつは先ほどちょっと話がありました。長野南高の同窓会の方の話もちょうとありましたが、やっぱり別の学校をつくっていくという、統合して別の学校をつくっていくということよりも、もっと高校間の連携を深めるという、検討の余地がいっぱいあるのではと思います。

そういう点は、しっかり議論をしていって、考えていく必要があると思うので、私は総合学科については、一地域にひとつというようなことを考えていく必要があるのかというのが疑問です。

特にこの地域では、市立皐月があって、もう1校つくるというようなことで、本当にいいのかなと思います。

以上です。

(中村委員長)

ただいまのご説明、ご意見について何かございましたら、お願いします。

(若麻績委員)

確かに先生がおっしゃるとおり、魅力づくりのことは本当にまだちょっと見えない部分ですが、子どもたちから見た魅力づくりと、学校経営から見た魅力というのが両方ともあるんですが、その辺の分別がちょっとついていない部分もあります。

それと学校は、やはり経営していくものですよね。そういう中で、総合学科をつくったときにはどんな魅力づくりをするのかということ。そして第2回推進委員会のときに、全国の設置状況の表が出てきますが、例えばこれでこのままいった場合に、長野県内には5校の総合学科が設置されることになります。

例えば東京都を見ますと、17年度以降に設置準備を入れているのは9校、現在6校ですよ。資料7に出ていました。それと大体都市部の、例えば札幌、仙台、埼玉、そういうところには一切ないというのがこの表で分かります。

そうすると長野県の規模と大体同じくらいのところ、200万ぐらいとして、その中の県民レベルで見ますと、どこの例が合うのでしょうか、ちょっと分かりませんが、それを比較したときに果たしてそれが全国レベルでどうなのかというあたりは、いかななものでしょうか。

(中村委員長)

事務局、説明をお願いいたします。

(吉江高校教育課長)

すみません。

今の若麻績さんの関係で、せんだっての資料7で申し上げたいと思いますが、一般的に長野県とよく対比される県としましては、福島県あたりが面積的なものとか、あるいは人口的なものの対比として使われますが、ここでご覧いただきますと、福島県が8校という

形になっております。

それとお隣の新潟県は、ちょっと長野県よりも人口とか多めでございますが、ここが 9 校というような状況になっているということでご理解いただきたいと思います。行政的なイメージからしますと、この辺がよく例として比較されるところということでございます。

また面積的に申し上げますと、長野県よりちょっと面積が大きい県が岩手県、その岩手県の次が長野県ということになりますが、この岩手県は 5 校というような状況になっています。

それから若干、先ほど来話題が出ている関係で、付け足させていただきますと、今回長野市立皐月が総合学科高校になるということの中で、そことの関係はどうかという議論が出ておりますが、以前お出ししました長野皐月の資料で、また先ほど委員長さんのほうからお話ございましたけれど、今、長野皐月が考えている系列というのは 4 系列でございます。1 つ目はとしましてはスポーツ専攻系列、2 つ目としまして国際人文科学系列、3 つ目として環境情報系列、4 つ目として福祉生活科学系列というような形になっています。

この系列というのは、それぞれの学校が総合学科設置にあたりまして、今後必要なものを決めていくということでございますので、当然ながら系列が異なる内容。その母体自体が、どういう母体かによりまして、それも確かに違ってくる面があるかと思えますし、また塩尻志学館の場合は、農業と家庭科を持っておりましたので、それをベースに考えて 8 系列をつくった経過がございます。

そういうことによりまして、いろいろなバリエーションの学校ができるだろうと考えている次第でございます。

(中村委員長)

はい、ありがとうございます。

若麻績委員、よろしいでしょうか。

(若麻績委員)

そうすると今のお答えのとおり、福島、新潟と比較すると、長野県全体で見ると、まだまだその数に及ばないという比較を持っているということですね。

(中村委員長)

ほかに何かございますか。

進路指導という観点から、中学校の先生にお聞きしたいのですが、職業科と普通科を選んでというところは、やはり生徒は難しいのでしょうか。私はそういうふうに思いますが、宮本委員、お願いします。

(宮本委員)

難しいと思います。

本校は、夏休みに入る前ですが、3 年生は全員が三者面談をやりまして、もちろんその前に夏休み中に多くの高校が体験入学をしますので、それに向けてどんな進路なのかとい

うことで、正式に第1回ぐらいのときに意向を聞くわけです。

子どもの中には「更級農業高に普通科はないのですか」とか「どうして松代高校の商業科に行きたいんだ」と言ったら「成績がそのくらいだ」とか、この前の資料にもありましたが、入学してから専門の勉強をしたことを生かす大学進学を選択する生徒が、そんなに多くないということも聞きました。

中学生の段階で、職業科というように、ある程度小さな専門のところを目指すという生徒は、そうはいないと思います。難しいと思います。従って私としては、総合学科のことについて、どこにつくるかについては別ですが、かなり魅力を持っているわけです。

ただ、今、系列の問題もありましたし、どんな学習が可能なのかということもありますけれども、中学生の段階においては、やはり進路選択というのはかなり難しいし、それを将来にわたってずっとやっていくこと自体が難しいものですから、総合学科ということで少しずつキャリア教育をしていくということは、今の世の中としては大事な段階ではないかなと考えています。

(中村委員長)

ほかにこの辺のことで何かありましたら。

(小山(元)委員)

お願いいたします。

今のことに関連して、中学のほうへちょっとお聞きしたいことがあります。

文部科学省が出しているキャリア教育ですね。キャリア教育は、やはり大事に学校教育に取り入れてきて実施しているわけですが、総合学科に生徒諸君たちが、この絵を見て選ぶ場合に、キャリア教育が中学校できちっと定着してきていれば、割合子どもたちもそういう面は育ってきていると思います。

しかし総合学科の場合には、まずどういう学校であるかと、中身のほうへ入っていく導入がございますね。教科単位を自分で選択するわけでしょう。だから、どういう将来を目指して、この学校へ入っていくか。そしてまた入ってから、自分たちで選択して学習していくのだと。それはやっぱりキャリア教育のところへ、きちっと位置づいてきたなというと、最初に選ぶときと、入学してからそういう選択の立場で持っていく場合と、それだけの力が付いているということが大事になっていくのでは思います。

総合学科自身も、私は詳しくもないし、実際にやっているわけではありませんが、そう見ていくと中学からずっとつながっていくわけですから、そういう点では懸念されることはないのかどうか、その辺をちょっとお伺いしたいなと思います。

(中村委員長)

宮本委員、お願いします。

(宮本委員)

キャリア教育については、この前坂口先生のほうからも話があったと思いますが、最近中学校では、進路というより、進学というよりも進路のほうに重点も少し置きまして、1年生からボランティア活動だとか、職業選択だとか、地域に行っているいろいろなところを見てきたりというようなことで、総合的な学習の時間を利用して、結構進んでいると思います。

高校と一貫というほどではありませんが、以前よりも子どもたちは職業観だとか、将来について自分はどうかということを考えているような気がします。先日も職業体験学習の後に必ず作文を書かせますが、作文とか感想を書かせたり、あるいは高校の前期試験などにいろいろなことで質問されたりするものですから、自分で自分のことを考えて、あるいは将来どういう勉強がしたいのだということを、少しずつ持たせるような指導もしていますので、子どもたちは成績だけではなくて、自分はこういうふうに勉強したいのだ、例えば福祉の勉強をしたいのだということで、結構真剣に考えていると思います。

だから中学校段階でも、少しずつそういう教育はされてきていますし、子どもたちも頑張っているのではないかなと思います。

ただ、私は心配するのですが、前回にも出しましたが多部制のこともありましたけれど、子どもたちは進路については、決まったらもうそこしかないんだという点については、中学校の段階としては心配なのです。例えば高校へ入ってから、もう一度自分でやり直すということが、生涯学習の中で可能じゃないかなと、総合学科もそうじゃないかなと思うんです。単位制についてもこの前も私は質問しましたが、やめた子どもたちがまた自分で勉強したいのだということで、幾つかやり直しがきくと。

必ず何か決まってしまうたら、例えば高校の場合には、今のところ全日制の場合には、1単位落としても次の学年に上がる前に、もう1年やるとしても、また全部初めからやり直すと、全日制の場合にはそうなっているわけです。例えば数学を落とした場合に、あと全部40数単位を取ったとしても、また1年生の40数単位を初めからやり直すわけです。

だからそういう子どもたちを考えると、途中でやめる子どもたちも多いわけです。そうじゃなくて、やっぱり総合学科とか単位制になると、そういう魅力というか、もう一度自分で修正を済ませて、もう中学校の段階で工業系、理数科というふうに決められるわけじゃないものですから、少しずつ中学校の段階では職業観とかは結び付いていきますけど、やはりそういう高校というのは、これから必要ではないかと中学校の現場としては思うわけです。

私の勤務する学校の隣に屋代高校の理数科がありますが、先ほど小山委員のほうから話がありました。隣ですのでよく見えますので、子どもたちもよく見学に行きますが、とてもよくやっていると思います。この前も新聞に載りましたが、アピールをしながら、子どもたちを受け入れながら、体験学習だとかいろいろなことで成功しているのではないかと、私個人としては思っています。

子どもたちも近くにいますから、屋代の理数科に行きたいのだと思っている生徒も多くいますので、専門学科はそれぞれ違うと思いますが、そういうような魅力というのがこれからは必要なと思います。

長くなり、すみません。

(中村委員長)

ありがとうございました。

(牧 委員)

ちょっと乱暴な話になるかもしれませんが、さっき丸山先生からお話があったように、私も総合学科については長野県が本当に総合学科が必要かどうかということに対しては、たまたま今回初めてそんなお話があって、この委員会に出していただいているのですが、何となくなじまないかなという感じはしますが、ただ最近のいろいろな子どもたちの考え方とか、学生生活の過ごし方を見ていると、非常に多感な時代、感受性の強い年ごろの中で、物事を考える視点というのは確かに親と違ったことを考えるんですね。

ですから選択肢を多くするという事は、非常に大事なかなと思っています。ただし私は産業界の一員ですが、実業高校がなくなって総合学科だけになると、それも何か寂しいような感じがします。確かに高度な産業社会になっていますが、現実としてまだまだ地元の産業界は新卒の高卒の生徒さんがほしいという企業が、それぞれあるわけです。

確かにマスプロダクト・マスセールされるものは、海外に移転していますが、しかしながら現場で働く人材も必要なのです。ですから 100%、高い技能、技術、知能を持った人たちだけで、企業がやっていけるかといえば、それはできませんね。やっぱりいろいろな資質を持った人たちによって、構成されているわけですから、私どもの考えから言うと、総合学科を地域にどれだけ配置すべきかということについては別ですが、必要かと思いますが、実業高校を残していただきたいという気持ちももちろんあります。

たまたま地域性からいうと、農業高校、商業高校が我々の地元にもありますが、産業界は今でも工業科、あるいは電気科、小さくてもいいですが、そういう生徒がほしいというのが実態です。総合学科を全地区に配して進めるということも確かにいいのですが、実態の地域産業界における位置付けからいうと、なかなか高卒で入っていただく人もなくなっちゃうんじゃないのという部分も内心はあります。

私は総合学科で何を勉強するかということに対しては、それは専門的な協議機関でいろいろ検討し、また他県の状況あるいは文科省の指導の中で、また要求されると思いますが、やっぱりこの実績の表がありますように、魅力ある高校をつくるということは、地域、地域の普通高校にもっと注目すべきだと私は思います。

競争もあるので、やっぱり学校はすごくしていかなければいけないと思うんです。あらゆる面で、学校のできた背景というのもありますし、伝統もあり地域に密着したということも分かりますが、やはり時代のことを考え、これからのことを考えれば、どんどん地域経済、文化、社会の仕組み、いろいろな面で変わってきていますよね。

ですからそれにやっぱり対応した人材をつくっていくということも大事だろうし、そういう部分では、やっぱり魅力ある高等学校というのは、普通科を中心として多くの、半数ぐらいの短大を含めて、浪人も含めて、半数ぐらいの方が次のステップに行くわけですから、地域、地域の普通高校をどれだけ充実させるかということと同時に、総合学科とか職業高校とか、そういう部分でも、ある部分では地域性に密着した、そういう学校の魅力というものを考えていく必要があるし、結論的にいうと、今の実業高校はみんななくなっていくというのは寂しいかなという感じがします。

(市川委員)

私も産業界からの意見なのですが、やっぱり我々産業界からすると、今の社会経済状況にあったような人材がほしいというのは当たり前のことでございます。そういう面でいくと、総合学科的な教育というのは私どもは非常に魅力があると思っています。

ただ皐月高校の例でもお分かりのように、指導者が誰かということが非常に重要だと思っています。例えば先ほど委員長さんがおっしゃったように、国際親善の担当の方が教員になれるとか、あるいはスポーツでいうとオリンピックの経験者の方が教員として赴任するとか、そういう指導者の層がしっかりしていれば、私はこの総合学科というのは、非常に魅力がある高校だと思っています。

ただ、北信に1校、南信に1校という校数には私はこだわりません。指導者がどう確保できるかということが、私は重要な問題だと思っています。

ただ先ほどの資料の中で、福島県に8つありましたね。この実態を聞いていないので、やっぱり我々は、詳しく今までどのようなもので存続しているかということも、参考になるかなと思って、もし調べていただければありがたいと思っております。

以上です。

(中村委員長)

今、もしコメントができれば、事務局からお願いしたいと思います。

(柳澤教育主幹)

福島の場合につきましては、次回までに調査しましてご報告できるようにしたいと思います。

(中村委員長)

はい、どうもありがとうございました。

(青木委員)

総合学科高校、ある意味ではちょっと今流でない後退的な私の思いを、ちょっと申し上げさせていただかなければいけないわけです。

この「総合学科大学」という、年齢的なレベルだけで言うなら「総合学科大学」だったら何となくイメージができるのですが、自分で学習するメニューを自分で組み立てていく。もちろんその中には、学校の指導者のアドバイス等もあるのですが、中学からキャリアとして自分の将来、自分の職業、自分の地域の中における自分が、どんな役割を果たしているかということを、中学生の時分から今、もう学習しているわけです。

丸山先生や、宮本先生のお話もありましたけれども、決して満足がいくものではないというようなお話がありましたね。その満足がいくものではないのを、多感な高校生の時代まで引きずってそこでやる。でも、私はもうちょっと一般的に、いわゆるかつての単純な考えから、普通高校の果たしてきた役割。要は、貪欲(どんよく)にこの社会を構成する指標というか、条件というか、あらゆることを幅広く、そのレベルをローレベルにしているのではなく、できるだけハイレベルなところでみんなで学習しようという、基本的な基

礎学力のアップがあって、それから後の職業選択、将来選択、自分の役割の位置の確認等はここならすばらしいと思うんです。

今の私の偏った高校生に対する見方からすると、今、総合学科という非常に新しい今流の形を推し進めるのは、私たち大人の思いだけであって、果たして子どもたちは「それはほんとにもっともだ」と言うのかと考えると、少し不安が残る。というのも今の子どもたちは結構自分で垣根、枠、柵を設けて、興味のあること、興味のないこと、関心のあることないこと、好きなこと、好きでないこと、楽しいこと、楽しくないこと、こういうものをものの見事に分けますよね。

その分けた自分なりのはかりの中で、果たして高校生のときに、しっかり学習しようとするのと、一切目もくれなくなってしまうことの線引きをしていいのかという不安が付きまといます。

全般的にやはり、総合学力といいますが、基礎学力をまず高めることが先決であって、非常にちょっと高校生に対しては失礼な言葉になりますけれども、子どもたちのある意味では逃げ口というか安易な道を、逆にいうと提供してしまっているのではないかという危険、怖さを少し感じるのは私だけでしょうか。

それは、ちょっと心配なのです。

(宮本委員)

今の青木さんの言うとおりでと思います。

中学校の場合の現場でいいますと、実は新しい学習指導要領というのがありまして、それがどんどん変わってきてまして、現在中学校の段階で、かなり選択の授業というのが増えているわけです。3年生の場合にも、例えば英語とか、技能教科もそうですし、学校によっても違うわけですが、時には英語がたくさんだとか、数学を多く取る生徒、そして芸術を多く取る生徒、あるいは英語と数学に関しては少人数ということで、自分で課題別だとか、能力別を選択したり、あるいは先生を選択したりということで、かなり中学校の段階で自分で自分のところを考えて選択する授業というのが、3年生になるとかなり多いわけです。

それで高校も現状はちょっと分かりませんが、中学校の段階で、例えば本校の場合には2学期制を採用していますので、学期が終わった後にアンケートを採って、授業の変更をするとか、課題を選択するとか、以前の中学校の現場と比べましてかなり生徒たちの選択の幅が、時間数に言えばどのくらいになるのか、かなり多いと思います。

自分で選択をする。例えば国際関係の進路を希望する生徒は、英語であれば、スピーチの授業だとか、英作文の授業とか分かれていて、かなり選択して、毎日あるのかどうか。かなりあって、高校の総合学科みたいな形になってきてまして、学校によっては先生たちがそろっている場合にはそうなっていますので、今の意見も分かりますけれども、中学校の段階でかなり選択の幅が広がっています。そういう学校も高校に上がったときに子どもたちとしては選択ということについては、かなり慣れているかなという気がします。

もう中学校の段階では、かなり選択の授業があります。

(小山(壽)委員)

青木委員さんのお考えの当たる部分というのは、恐らくあるだろうと思います。そういう意味でいうと、逆にそうならないように学校がどういうふうに指導していくかということだと思います。

志学館でいいますと、志学館でつくったビデオを見ただけですので、実際に授業を見ておりませんが、1年生で「産業社会と人間」という科目が必修になっているというような話が、この前ございましたよね。あれをやりながら自分が将来どういう仕事をしていきたいのか、あるいはどのような生き方をしていきたいのかというようなことを、それぞれ考えていって最後にひとまとめするわけです。

まとめたものを、塩尻のレザンホールで1人ずつ240人が発表していくのです。そのビデオを見ましたが、なかなかユニークな発表をする子もありまして、そういう発表を契機にして2年のとき自分の選択するコースをまず選んでいく。コースに応じた教科選択が行われている。

もちろんコースは選びながら、そのコースから外れた科目も選べると。しかし基本は自分が選んだコースに対応した科目を選択していく。こういうようなことをやられています。

現在、普通科におきまして、2年、3年次においては、やはり選択科目が非常に普通科の場合にも増えておりまして、それは自分でどういう進路を取っていくのかということに応じて、科目選択をしていく。例えば丸山委員さんの中野高校の場合にも、コース制的なものはやっていると思います。

そういう形で、自分のコースを選ぶことによって、多分その場合には基本的には選択科目が決まっていって、さらに自由選択科目の部分があるというように選択していているのではないかな。そういう意味でいうと、安易な科目選択というように流れていかないように、学校がどれだけ歯止めをかけていけるのか、そんな努力を学校はしていかなければいけないと思います。

しかし生徒の大半は、やはり自分の将来を考えたときに「こういうものが必要なのかな」と思いつつ、真剣に科目選択やコース選択をしているのかなとは思いますが。

(塚田委員)

前回、塩尻志学館の説明をいただいたときにお聞きした記憶がありますが、このような形態の学校に入ってくる生徒たちは、かなり意識の高い生徒たちが入ってきて、進路とかについてかなり自分で考えて決めていくんだらうなとお聞きしたら、必ずしもそうではないと。やっぱりアドバイスを受けながらというお話もありました。

そこで私もお聞きしたかったのは、中退率とか満足度はどうだったのかということをお聞きしたかったのですが、今日は資料5で出していただいて、中退率もかなり県の平均からして低いですね。それから満足度も90%以上というのは、やはり相当子どもたちにとっても、この学校が魅力ある学校だったということじゃないかと思います。

そういう意味で、やはり総合学科というのは今のところは丸山先生が言われたように、問題もあるかもしれないけれども、少なくとも長野においてはうまくいっているのではないかなと感じます。

(清水委員)

1点ちょっと分からないことがありますのでお尋ねします。

県内に幾つかの総合学科を設置しようというお考えだということは分かりますが、それぞれの総合学科、それぞれの学校は同じ均一的な体制でやっていくつもりなのか、先ほどから聞いておりますと、総合学科をつくるにいたしましても、今までの既存の学校を総合学科に変えるということであるならば、例えばその実業高校のメインとなるようなところが主体となる学科であって、そこからいろいろなカリキュラムを選ぶということになっていくと思います。

そうした場合に、何校か総合学科をつくったときに、言葉の表現は悪いですが、金太郎飴みたいに、同じ状態のものになるのか、これをまずひとつお聞きしたい。

話は全然違いますが、私は父兄の立場で出席させていただいていますが、実態として青木さんのおっしゃられたこともものすごくよく分かるので私も同感ですが、中学校から高校へ行く段階で、志望校を選定するにあたって、何をポイントにしているかということを考えてみると、実態はやはり自分の実力にあったところを選んでいるというのは、一番大きな選択理由なのではないかと思っています。

実業高校へ行く子、みんながみんなそうではないと思いますが、いろいろな志望、自分の思いとか、経済的な理由もあるかもしれませんが、いろいろな要因があるとは思いますが、7割以上は進学校を狙っているのが現実なのではないかなと私は思っています。

自分が将来何になりたいかということを、中学を卒業する段階で果たして多くの子どもたちが決められるのかなと、私は疑問に思うところです。現に高校に入ってから進学はするにしても、将来本当に自分はどんな職業に就くかということを決めあぐねている生徒はかなりの数がいいます。

たまたま私の知り合いにハローワークにお勤めになっているお父さんがいらっしゃいましたが、「清水さん、大学卒業生でニートという職に就かない学生が多いのには驚いているのだけど、院卒でさえ就職に就かない人がいるんだ」という話を聞かされて、本当に驚いてしまいました。

その子にとって、自分の将来、自分が幸せになるための道というものをどの時点で決めるかというのは、その子によって違うでしょう。確かに中学においても、高校においても、現に須坂高校においても来年からは選択する科目、自分で自由に選択する余地がかなり増えてきているということを聞いております。

選択肢が多いということは、それにこしたことはありませんが、果たしてそれが子どもたちにとって魅力なのかなと思います。やっぱりもっとストレートに、中学校を卒業する子どもたちが志望校を選択する上での基準は、魅力ある高校というよりは行きたい高校だと思うんです。行きたい高校が総合学科に持てるかどうかということが、ちょっと私には見えてこないのです。

あまりにも選択肢が多過ぎてしまって、非常に乱暴な言い方ですが、総合学科ができたらできたで2年、3年様子を見ていれば、大体定着してこういう学校なのだと認知されてくるのでしょうけれども、最初の段階において中学生がそこを選ぶときに、どういう動機で総合学科を選ぶのかなということが見えてこないと私は感じます。

(中村委員長)

はい、ありがとうございます。

議論の途中で申し訳ありませんが、休憩を取りたいと思います。

【休憩後再開】

(中村委員長)

時間になりましたので再開させていただきます。

先ほど清水委員から総合学科のことで、全県4地区に設置される総合学科というのは、輪切りのように同じかというような学校かという質問がありましたが、そうではないですね。地域に応じて、母体となる学校に応じて特徴をつくっていくべきものだと思います。

事務局、この解釈でよろしいでしょうか。

(篠原教育幹)

はい。まさにそのとおりであろうと思います。

例えば塩尻志学館の場合は、農業でワイン醸造いう、これは全国でも非常にめずらしく、高校生がそういう活動をしている。その辺も非常に大事なベースになりまして、系列でいきますと、先ほど課長が申し上げました、8つのベースの内のひとつの食品化学となります。

それから塩尻高校の場合は、農業、家政科、普通科と3つありました。この家政科、農業。農業分野では、もうひとつ環境科学というのをつくっています。家政科の分野では、生活福祉をつくっています。それから家政科の部分は、食品のほうにも一部入っているということでもあります。

後は普通科系統の系列ですが、全く新しくつくり上げていったのは、芸術スポーツ。音楽、美術、それからスポーツ、書道、そういったものに力点を置くような科目を置いたということ。

それからもうひとつは情報ビジネス、つまり商業系の科目を置いていったということです。そんなことで、それまであるものを土台にしながら、さらにその地域でほしい人材であるとか、育成したい人材である、そういったものにあった科目を置いて系列をつくり上げていくというのが、ごく一般的であろうかと思います。

それからもうひとつ、「中学生が選択できるのか」という共通した懸念が、委員の皆さんから出されているように思います。実際に塩尻志学館の場合の倍率、前期選抜、後期選抜の倍率でご覧いただければ、数字としては氷解できるのではないかなと思うわけです。

また、当然県下1校しかありませんので、非常に慎重に平成12年に開設してきてから、追跡調査をしたり、さまざまな意識調査をしながら進めてきております。そうした中で例えば、ほんの一例ですが志望理由、いろいろなサンプルをつくって志望理由を答えてもらっています。

これはもちろん年度によって若干違いますが、例えばこんな数字が出ております。進路希望の実現に有利であるということで志望したと。これは中学生が志望した数字ですが、73.2%という数字が出ております。

それからこれも総合学科としては、非常にその目的に沿った答えかなと思われるわけですが、進路や生き方を考える学習ができる。これが72.3%。これがいわゆる志望理由を持っていると。ほんの一例です。

従って、イメージを中学生はなかなか掴みづらいのではないかなと思われるご懸念もあるかと思いますが、やはりそこは先ほど小山委員さんがおっしゃいましたように、それぞれ所属する教員の努力の中で、どれだけピーアールをしていかれるかということも大きな要素ということが言えると思います。

以上でございます。

(中村委員長)

科目選択というのは、大学の専売特許だったのですが、最近は高校もありますので、大学側でのこととお話ししたいと思います。と言っても、私がいる大学ですので、一地方大学で、それから長野県の高校生の占める割合は2割か3割だったと思います。年によって変動しますのではっきりは分かりませんが、そういうこととお聞きいただきたいと思います。

私がいるところは工学部で、1年生の学習は松本キャンパスで行って、その後各専門に分かれてきます。ですから2年生からは長野市内にある工学部に来ます。最近の大学生は、非常に出席率が高くてまじめに授業を聞くというのが特徴です。これは教えてもらうのを待っている、というふうに解釈をしています。

先生が分かるように教えてくれるというのを待っているのではないかと思います。動機付けが非常に弱いので、自分がこの科目を選択して、それを将来自分の職業へ「こう生かしていきたい」というところが、なかなかできないと言いますか、少ない。

これも一部の学生はしっかり選択して、しっかりやりますけれども、ある一部の学生は、やはり決められないというのがあります。ですから時間割表にあるものすべて取って、全部入れてみて、単位をそれなりに取ってという形が一番多いかなと、そういうふうに思います。

先生方のほうが、それなりにメニューを用意しておかないと決まらない。それから、これは極端な例かもしれませんが、お父さんに相談して授業を決定するという生徒の例が今年度ありました。

自分で選択して決めて努力するという、そういうもっと基本的なことを義務教育の頃、あるいはもう少し小さいころから、いろいろな場面でやっていかないと、教育自体がなかなか難しいのではないかなという感じがします。これは一部の学生というふうにとらえていただければと思います。

動機付けをやっていかないといけないと思います。過去よりはよくなったかもしれませんが、偏差値で輪切り状態で入ってきてほとんどの子が同一レベルの成績というのは、最近は少し緩和しています。それは大学受験のほうが、多様性を持っていて推薦、それから前期、後期と。あるいは編入学試験。編入学というのは、ほとんどは高専の生徒ですが、5年制を卒業して大学の3年次に編入してくる学生がかなりおります。30名以上。工学部は1学年400人くらいいますが、そこへ30名くらいそういう形で入ってきます。

それと、工業高校の枠というものもあります。工学部に6学科ありますが、各学科に1

から2名ずつの専門高校からの枠というのがありまして、1、2名はとらなければいけませんので、毎年入学者がおります。

こうすることで多様性があります。勉強を熱心にやる場合には、やはり動機付けがしっかりしている。自分で決めて積極的に授業編成をしてやっていってくれますので、やはりそういうことをもう少し小さい段階からやらないといけない、訓練をしないといけないかなと、今、お聞きして感じてことです。

（塚田委員）

今、委員長が言われた大学生の現状をお話しいただいたのですが、多分そんなことも踏まえて先ほど清水さんのほうから、いわゆる多様性を選択していくということは、大学に進学をする中で、みんなそうやっていくのではないかなと言われたと思いますが、今の話を聞くと確かにそうだな、ただ大学へ行ってもそうなんだなと感じます。

今日出していただいた資料の2を見ると、単純に計算すると56.2%が高校を卒業して社会へ出ていくというんですね。そういう意味で、半分以上の高校生は高校を卒業して職業に就くということを考えると、高校の段階である程度こういう選択肢を与えてあげるという意味でも、総合学科ということは非常に価値のあることではないかなというふうに私は思います。

（清水委員）

多少私の認識と現状というものが違っていたということによく分かりました。確かに塚田さんのおっしゃるとおり、総合学科の必要性というものは、この時代のニーズではないかなという気がしてきました。

先ほど父兄の立場でお話しさせていただきましたが、私も製造業で企業の立場から言わせていただくと、先日、あるドキュメンタリーのような形で、実業高校だったと思いますが、その高校生、例えば機械科の子が町工場に一定期間、研修を受ける。自分の興味のある企業に行き、一定の工程を終了したものにはその単位を与えるという番組を見ました。

総合学科がもしできた暁には、ぜひそういったようなものを期待したいと思います。先ほど高校同士の連携というお話もありましたが、今、大学でも産官学といった連携を、非常に大事にしておりますし、非常に注目されているところですが、せっかく総合学科という選択が自由に履行できる高校ができるのであれば、そういった課程もぜひ盛り込んでいただければありがたいなと思います。

その企業に将来勤めるか、勤めないかは別として、企業側は、小さい町工場のいわゆる匠（たくみ）と言われる職人芸を絶やすことに、ものすごく危機感を持っている企業が結構あるわけです。

先ほど牧さんがおっしゃられたように、やはり製造現場というのはいろいろな層の、いろいろな特色を持った人材が必要なわけで、そういった意味においても総合学科にそういうものがあればいいなと思っています。

ちょっと蛇足になりましたが、よろしくお願いいたします。

(丸山委員)

今ちょっと議論になっている、塚田さんのほうから言われたことと関連して、ちょっと違った観点で、私はそういうふうには思いません。

半分以上の生徒が、高校を出て就職をするということで、ある意味でいろいろな選択肢を持って、高校のときにいろいろな準備学習をして力を付けて、それで社会へ出ていくと、そういうための総合学科という話でしたが、そういうことがもしできればいいと思います。私が知っている範囲で、全国の総合学科を見ると、そうではないと思うので、先ほどちょっと言ったのです。

私が出した資料でも言いましたが、職業科目については実際は取れるような仕組みにはなっていない、実際の取り方によって取れないものですから、職業高校と比べたら取れる単位数が3分の1ぐらいだと思います。

だからどうしても総合学科というイメージが、何となく進路もはっきり決まらないし、選べない子たちがまだいて、そういう子たちについてはいろいろな科目を選んだ上で、自分の進路や自分の適性を確かめて、それで自分の進路を決めていくと、そういう3年間だというイメージがあるかもしれませんが、私はちょっと違うと思います。

総合学科は、つまりその準備でさらに自分が選んだ進路については、その上の学校でやると、そのための学校だということじゃないのかなと思うのです。だから先ほど言いましたけど、全国でいうと進学にシフトした総合学科のほうが成功しているわけです。つまりそれは大学だけではなくて専門学校を含めてです。

だからよく悪口を言う人は、専門学校予備校だというふうに言うのです。つまり今の子たちが、なかなか自分の関心や興味や進路なんかについて、なかなか大きくなって考えられないと。確かにそうで、そのとおりです。高校のときでもそうだし、大学でもそうだったという話になりました。

その子たちが、中学ではまだ職業科を選べないので普通科か職業科が困るので、いろいろな科目も選べて、職業科目も選べて、自分はどこに向いているかなというふうにして3年間勉強してというのですが、現実に勉強しているのが、多少1年のときに選択科目があったとしても2年生からですね。

そこに2つ問題があり、ひとつはなかなか決められないというけれど、現実高校で選択科目を選ばせるのは、前の学年の夏ころから準備するわけですよ。もちろん7月に入ったときから、ホームルームや総合的学習の時間などを使って、この進路について考えさせていくということをするにしても、実際に選択科目を選ぶ作業にはいるのは、1年生の秋なんです。

そうすると、夏休みを挟んで数カ月しかありません。結局中学校で考えられないと言っても、選べるのは数カ月先に延ばしただけの話です。ところが選んで、それから今度いろいろなことを選んでみて、まだはっきりしないから例えば農業の科目をちょっと選び、情報のも選び、商業のも選んでみて、一応のコースは系列があるとしてもですよ。

選んでみて、どれが向いているかなと考えて、じゃあ上の学校へ行くのにどういう学科へ行くかという、乱暴に言うとなんかということが総合学科じゃないかなと。むしろ社会に出る、就職するという子にとって、総合学科というのは十分なのかな疑問です。

先ほど言いましたけど、今の職業高校がそれでいいとも、普通高校がいいとも思ってい

ません。中身はもっと改革しなければいけないのですが、そういう意味で言ったら今、地域の産業界では職業高校出の生徒にどんな力が足りないのか。職業教育についてのどんな力が足りないのか。あるいは普通科から就職する子たちは、どういう力が足りないのかというところがあると思うんですよ。それは総合学科なら、全部解決するということではないと思います。

もうひとつ言いますが、じゃあ総合学科的な工夫というのは、総合学科じゃなければできないのか。総合学科ということになると、別の学校だし国からも定数が付きますという余裕があるわけです。施設としてのお金も出るかもしれませんね。だけど総合学科的なそういう工夫というのは、普通科でも職業科でも一部できるのではないかと。むしろそういう特色を、それぞれの学校がつくるということのほうが、本当はいいんじゃないかなと思います。

そういう点では、総合学科を出た上ですぐ就職という子たちは、本当にそれでいいのかなという感じがどうしてもするんです。特に職業科の基本的なところも、きちんと身に付いているのかなと。根本的に高校でやる職業教育なんて、もう役に立たないよという話なら別ですが、もしそれがあるとしたら産業界にとって、職業高校というのはどんなことをやってくれよということが、やっぱり必要なのではないかという思いがあります。

(小山(壽)委員)

資料1をご覧いただきたいのですが、数字の読み取りに間違いがあります。資料1のところで「就職」というのがございます。合計数で見えていただきますと、平成16年度は15.2%の就職なんです。

従ってこれは、すべての全日制、定時制をひっくるめた、卒業生の中に占める就職の割合は15.2%ということであります。ということは、いわゆる職業科へ行った生徒たちにも、専門学校だとか、短大だとか、大学だとか、そんなところへあらためて進学をして、さらに高校のときに学習したことを高めていく、継続教育という言い方をしますが、深めていく。こういう件数が非常に多いということです。

あるいは前回、農業科の卒業後の進路というものが出ましたが、農業科の生徒についていえば、必ずしも高校のときに勉強したものとは違う分野へ進学しているというような生徒もいるわけです。非常に多様な状況はありますが、今、職業科の学校も継続教育をかなり意識しながら、それぞれの分野の基礎基本を高校のときに教えているというところが多いのではと思います。

それから総合学科というものに対して、総合学科であればすべて問題が解決するという発想はやっぱりこれはおかしいわけで、100%総合学科に求めて、100%ないから駄目だという言い方で学校否定するのはいかなものかというふうに思います。当然問題点もあると。これは前回も申し上げましたが、総合学科というのは職業科に代わり得るものではないということです。これは第三の学科ということで出てきているわけですから、職業科に代わり得るものだということを主張するものが誰もいないわけです。そういう意味で、総合学科というのはもうひとつ別のものであるということが1点です。

それからもうひとつ、他の学校だって総合学科にならなくても、総合学科的な試みはできるだろう。これは今、どこの学校も試みていることであろうというふうに思います。普

通高校でも例えば、簿記だとか、情報だとか、福祉だとか、そういうような科目を取り入れてコース制を採用しているわけですので、それはそれでそういう努力はしていくべきだと思います。そういう努力をしていることがすべてで、そういう努力をしているのだから総合学科を取り入れる必要はないだろうというのは、ちょっと議論としてはおかしいのではないか。

そういう努力は、そういう努力として一方ではやっていく。そして他方においては総合学科という新しいひとつの学科も導入をしていく。現に志学館の通学範囲が前々回に出ましたけど、非常に広範囲から通学しているという状況はあるわけですから、それだけやはりニーズがある。これが身近なところにできた場合には、さらにその掘り起こしが進んでいくのではないかなと、そんなふうに思っております。

(牧 委員)

事務局に説明をお願いしたいのです。

文科省の指導要綱に基づいて、この総合学科というものがあるわけですが、県レベルで学校に対して、その制度をどのように考えているのか。

高校の場合は定時制は4年で、全日制は3年ですね。総合学科も3年なのですか。これは例えば4年にするとか、例えば特徴ある学校づくりにして、ある部分では高校生でありながら専門的な勉強をしなければいけない。どこまで要求するのかというのは別なので、いろいろな選択肢があって、いろいろな教育カリキュラムがあるとすれば、もっと何か高校生でありながら、大学とまではいかなくとも1年が一般教養であれば2年、3年は専門、あるいはもう1年ぐらい実社会に役立つぐらいまでの、一般的な社会教育といえますか。受け入れする企業などを見ていると、最近非常に家庭のしつけもきちんとされていないということもあるかもしれませんが、学校を出てすぐやるということはこんなものかなと思いますが、いずれにしても何もできないと言ったら語弊ですが、朝の「おはよう」から帰りの「さよなら」まで、掃除の仕方、言葉遣いの仕方あるいは伝票を記入する、文章を書かせる、何にしてもかなり社内教育というものが充実してやらないと、なかなか難しいですよ。これは大学生にも言えますが。

かつての時代よりも、ある部分ではちょっと落ちているなという気がします。就業規則や安全衛生法、労働三法ということをお勉強しますが、ほとんど知らない。学校ではほとんど教えてもらっていないのか分からないのですが、現実問題としてやっぱりそういう部分で、もうちょっと分かっていたら、楽にもっともっと進められる、スタートができるのかなということもあって、普通高校はやむを得ませんが、実業高校あれば、あるいはそういう特化した総合学科であれば、もう1年ぐらい余裕を持った教育をすることによって実社会への受け入れが、非常に受け入れ側からするとスムーズになるのかなという部分も考えられることもあるのですが、こういう問題というのは国家政策というか、文部科学省が決めることであって、それは県のレベルとか、そういう部分では決められないことなのではないでしょうか。

それをちょっとお伺いしたいと思います。

(中村委員長)

事務局、お願いいたします。

(篠原教育幹)

まさにそのとおりでございます、高校の場合には指導要領に基づいて、結局 74 単位を履修すれば卒業資格が与えられるということになります。そういう中で生徒や保護者の皆さんが、それでもあと 1 年余計にやれと、そんなふうに進めるか、あるいは希望するかどうか、その辺はやはり社会の情勢の中で決まってくるのではないかと思います、今のところは一応いることはいますが、非常に数は少ない。

もう少し勉強してから社会へ出ようとか、もう少し勉強してから大学へ入ろうとかいう子どもはゼロではありませんが、限りなくゼロに近いという状況になっているわけです。

(牧 委員)

それは単位が取れなくて残るのというのではなくてということですか。

(篠原教育幹)

単位が取れないということが理由ではなくてということです。

(牧 委員)

単位は取ってあるのだけど、残るという方も一部いらっしゃるのですか。

(篠原教育幹)

ええ、一部です。ほんの一部ですが、ゼロに近いです。

(中村委員長)

はい、関連して何かございますか。

(宮本委員)

今の県教委の説明のとおり、特に総合学科のことについてこの会でいろいろと勉強してきて、少しずつ分かってきたのですが、総合学科は全国の場合に例えば 1994 年だと 7 校だったのが 2004 年には全国で 248 校あるということで、しかもその中の総合学科については、すべていろいろな特徴があるものですから、必ずしもステレオタイプで総合学科というようなことも言えないし、地域と結び付いた特色ある総合学科というものもあると思います。

だからこういう総合学科、そのままこの総合学科をここに持ってくるとか、そういう考えじゃなくて、総合学科というのを特徴を十分に引き出しながら、その地域にあったりあるいは生徒や、あるいは子どもたち、保護者の皆さんだとか、地域にあった、希望を聞いた総合学科というものも可能じゃないかなというふうに思っています。

特に総合学科も、議論になっています多部制・単位制についても、3 年以上の在籍で 74 単位取れば卒業できるということですので、必ずしも今までの普通科と学年制とは違いますから、先ほども言いましたがその辺のところに私は魅力を感じています。ひとつのドロ

アップアウトの歯止めになるような、あるいは先ほども選択という話がありましたけれども、選択できるか、できないかではなくて、選択させるようなことをこれからやっていかなければいけないと思います。

子どもたち自身も、自分で考えながらある程度学力が付いたから選択できるというのではなくて、小さいうちから少しずつ選択できるような、ということでは総合学科というところはいいところだけ出せば可能かなと、私は賛成です。

以上です。

(中村委員長)

私も先ほど動機付けと言いましたが、普通高校で一般的な科目ばかりで動機付けというのはなかなか難しいと思います。もちろんそれで進学対応したり、いろいろな次の段階へと勉強を深めていくということは、先生方は努力されているとは思いますが、子どもたちも努力していると思います。

総合学科の選択できるという特徴のほかに、私はもうひとつ魅力があると思うのは、動機付けに対して非常にいいシステムになっているのではないかと思います。それは科目だけではなくて、やはり実習のような形、あるいは実務のような形で、例えばワインの醸造を学ぶというところを持っているわけです。

それをやるには、こういう科目が必要だよというふうに、あるいはこれを勉強しなければいけない、そのところを子どもたちが気がつくというところが、非常に大きなことじゃないかなと思います。そこがもうひとつの魅力というふうに、私は自分が教えている立場でそう思います。

何かほかにございますか。

(小山(壽)委員)

今までの議論の筋から外れていると思いますが、よろしいでしょうか。

総合学科については前々回もだいぶ時間をかけているし、今日もだいぶ総合学科について議論をしているわけですが、委員長さんの最初のご提案は、もう少し委員会の進め方についてのご提案があったかと思います。

私も前回の会議が終わった後に、設置要綱をちょっと読み直してみました。これは第1回のときに確認されていたわけですが、第1条では「高等学校改革プラン検討委員会最終報告書に基づき、高校教育を推進するための審議機関として、高等学校改革プラン推進委員会を通学区ごとに設置する」というふうになっているわけですし、あくまでも下敷きは検討委員会の最終報告書が下敷きになっているということでもあります。

所掌事項として4つの点がありますが、「魅力ある高等学校づくりに関する事項」。それから「総数決定基準に基づく、県立高等学校の再編整備に関する事項。」「総合学科高校及び多部制・単位制高校の配置に関する事項。」「その他各号に関連する事項」というふうに、なっているわけでありまして、やはりこれにそって議論をもう少ししていかないと、真ん中の部分を触れないで、周りをグルグル回っているような、何か隔靴搔痒(かっかそうよう：ものごとが思うようにならず、じれったくてもどかしく感じることのたとえ)というか、そういう感じがいたしまして、もう少し具体的な議論ができないものかなと感じてい

ます。

以上です。

(中村委員長)

冒頭で申し上げたとおりのことをまたご指摘いただいたと思いますが、それにしてもやはり疑問点等ありましたら、皆さんで話し合っただけで解消しておかなければいけないということで、総合学科に関してもデメリットに関することで、今、ご議論をいただいて、ほぼ出尽くしたのかなと思います。

私が結論めいたことを言うのは、差し控えたいと思いますが、皆さんのお考えになっている魅力づくりのところに総合学科が入ってきたかどうか、そのあたりの議論ができたように思います。

具体的な議論に移ると申し上げてなかなかそこに行けないというところがあります。取っ掛かりとしては、やはり今、候補案に挙がっている、その辺のもう少し具体的な説明を事務局のほうからいただいて、それに対して先ほど言いましたように、この委員会として委員の皆さんから、こっちの案のほうが魅力が増すんじゃないか。あるいは事務局のほうで説明いただいたことは、ちょっと納得がいかないとか、あるいはもっと別な新しい魅力が得られる高校をご提案いただくとか、そういう方向へ行かなければいけないというふうに思いますが、いかがですか。

よろしいですか。

今、せっかく2時間以上にわたって総合学科を中心に議論していただいたので、候補案として挙がっているところの再説明といいますか、もう一度説明をいただいて、それが議論の取っ掛かりになるかどうか分かりませんが、説明をいただきたいと思います。

皆さんに資料は持っていらっしゃるでしょうか。

(三澤教育支援主事)

候補案の再説明、もう少し詳細な説明ということですが、次回にまた資料等お示しして説明させていただきたいと思います。

(中村委員長)

そうですね。そうしたほうがいいかなという気もします。

(小山(壽)委員)

ちょっとよろしいですか。

具体的な、それぞれの個別の問題は別として、例えば再編整備候補案の中ではA校とB校を統合すると。そして校地校舎はA校の校地校舎を活用するか、あるいは利用するというふうに書かれているわけですが、A校とB校を統合する。そして新しい学校が生まれるというふうに書かれていますね。

この辺について、具体的に事務局はどういうふうに考えておられるのか、ちょっとそこをお聞かせいただければと思います。

(中村委員長)

これは説明はよろしいでしょうか。もう何回かはご説明があったとは思いますが。

(三澤教育支援主事)

候補案につきましては、北信地区については飯山や、中野・須坂の部分ですとか地域ごとにそれぞれ統合を考えているという、ひとつの候補としてお出した資料でございます。

この委員会の中で、いろいろな要因からこういうことも考えられるのではないかというご意見があれば、それを大いに出していただきたいということです。

(吉江高校教育課長)

すみません。

今、小山(壽)委員さんからご質問いただいた内容と、若干ちょっとずれていたかと思っておりますので答えたいと思います。

おっしゃられたのはA校とB校を統合してというような位置付けの考え方ということだろうと思いますが、私どもはA校とB校を統合した場合に、いずれかの校地を使って、言ってしまうと、それぞれの学校のそれぞれの特色を生かした意味での学校をつくる、というような位置付けで考えているということでございます。

あくまでも、私ども日ごろから「統合」という言葉を使っているというのも、そこら辺にあるということでご理解をいただきたいと思います。

(小山(壽)委員)

要はA校とB校を統合して新たにC校ができると。たまたまC校の校地が、A校ないしはB校の校地校舎である、こういう理解でよろしいでしょうか。

(吉江高校教育課長)

C校自体が、そういう意味でA校とB校の内容を兼ねると、ある意味それぞれのものを入れた内容になるというような位置付けで考えた場合には、C校は新たな学校というイメージになるかと思っています。

ただ、考え方としまして当然ながらA校のDNAもB校のDNAも併せ持つというようなことで考えているということでご理解いただきたいと思います。

(小山(壽)委員)

さらに飯山について個別具体的に言いますと、3つの学校を統合することになるわけで、非常に大変なことで、どういうふうに地域の理解を得ていくのかとか、そういうことについて非常に大変な作業がこれから必要になってくると思っているわけです。

つまり計画案が出れば、それですべて片が付いて実行できるというようなものではないだろうと思っています。

現実問題として、今の課長さんのお言葉を借りれば、A校とB校が一緒になって双方のDNAを受け継いだ新しい学校が生まれていくためには、両校が相当協議をして、新しい学校づくりをしなければいけないということがあるだろうと思うんですね。

今、なかなか、再編整備候補案そのものが、非常に厳しい状態にさらされていて、この会議の中でも、そこになかなか入っていけない、そういう状況があるわけですね。

さらに、今、A校B校というふうに言いましたが、A校B校それぞれ地域にある場合には、自治体をまたがっているというケースも幾つかあるわけで、自治体がまたがっている中で両校をどうやったら、両校のDNAを引き継いだ新しい学校がつくっていけるんだろうか。

恐らく、その名前を挙げられた高校の校長も相当頭を悩ましているのではないかなと、そんなふうに思っているわけですが、次回で結構ですので、そこら辺について事務局としてどんなふうにお考えなのかということも含めて、お話をお伺いできればと思います。

以上です。

(中村委員長)

ほかに、今に関連してありましたら。

(小山(元)委員)

今の内容は、非常に重要なものですからね。

もう一度、私のほうで確認させてもらいたいと思います。今、総合学科制の問題で、A校B校というのが、出ましたけれども。総合学科でなくとも、いわゆる、今、具体的に出ました小山校長さんのほうから聞かせてもらったんですが、飯山の場合に、3つがそういう候補になっているわけですね。ですから、今の、課長さんのお話でお聞きしますと、A、B、C、3つのその高校の、大事なものをそのまんま受け継いで、DNAを生かしたひとつのものに大事に育てていきたいと、そういうふうにA、B、Cが受け継いでE校になるというふうな解釈をしてよろしいわけですか。

その点お願いしたいと思います。

(中村委員長)

事務局、お願いします。

(吉江高校教育課長)

飯山の場合は、ある意味そういうような形になっています。ほかのところも含めましてある意味、これは、第1回から全体的に申し上げていることなんです。私もはずっと総合的位置付けで考えておりますので、今の例で申し上げますと、当然ながら今後A、B、Cの例になります。

それで、先ほど小山委員さんにお答えいたしましたのも、総合学科の例という意味ではなくて、恐らく小山委員さんも一般的な意味合いとしての、お尋ねだったと思いますのでそういう意味合いでお答えしていますので、同様の考えでいる次第でございます。

(小山(元)委員)

分かりました。

(中村委員長)

あの、先ほどからの、総合学科に関する議論で、ちょっと違ったところへ来ていますので、その辺のところをご承知おきください。

(青木委員)

会議の進め方でいいんですか。

(中村委員長)

ええ、次回に詳しい説明をいただくということですので、こんな点をもっと詳しく説明とそういったことでお願いいたします。

(青木委員)

今、委員長さんのほうから、たまたま次回になりましたけれども、発表になりました候補案をもう一度、背景をご説明願って、それに基づいて協議を進めていくというやり方の説明がありましたよね。その中で、説明いただいた後、いや、そうではないと、今候補ではこうなっているけれどもそうではなくて、こういう別の視点からいうとこちらの候補ではないかという話まで入ってきたとおっしゃいましたよね。

(中村委員長)

はい。具体的な議論というのは、そういうことであると考えます。

(青木委員)

そういうことですね。そうすると、これ、委員長さん含めて、委員の皆さんに諮りたいんですけども、マスコミ、傍聴のいるところでそういう議論ができますか。皆、それぞれ、いろいろ課題を背負って出てきているわけです。そうすると、いや、この学校ではないでしょうと、ここの地域ではないでしょうと、それならもう、いろんな見方からするとこちらでしょうという議論はできますか。

できるかできないか、ちょっと言ってもらいたいと思います。

(中村委員長)

イメージとしては、校名を挙げるという具体性と、もうひとつは、先ほどの魅力づくり、ずっと議論してきました。そのことで例えば、多部制・単位制に関して一例が出ていますが、坂城ではなくて、もう少し分散して配置したらどうかというような話も出ています。そういうことだというふうに私は思います。具体的だというのは。校名を挙げて、「いや、多部制・単位制はこっちの高校だ」ということではなく、そこまで言えれば、それに越したことはないのですが、それはやはり、それぞれのお立場がありまして、なかなか難しいところがあると思います。

(小山(壽)委員)

今の、委員長さんのご説明のとおりだと思います。新たな候補を挙げてという段階では今ないと。個別具体的にね...

(青木委員)

でも、そうやるっていうふうにおっしゃったから、それに対して今。

(小山(壽)委員)

個別具体的に今、再編整備候補案が出されてきた、これについて、こういう問題があるではないか。こういうところがまずいではないか。あるいは、こういうことについてはいいだろう。というようなことについて個別ケースで議論をしていく。そういう中で、当然こういう問題点があるならば、こちらのほうも考えられるのではないかとということが議論の中で出てくるとすれば、それは、いずれ出てきてもいいと思うんですが、今は、まだそういう段階ではないのではないかと思います。

(青木委員)

でも、話の中に出てきますよ、それは。それをしなければ、足らない話しになって、皆さんできますか、それ。

(丸山委員)

今の話で、個別の候補、対案ですよ。対案の問題については、いずれ出てくるけれども、次回すぐにそれじゃないというのは、私もそのとおりだと思います。次回、今、委員長さん言ったような方向でいいと思うんですが、ただ、これは県が出した候補案、たたき台というのかかわった話にならざるを得ないんで、そこには、入るのは仕方ないんですけど、その前提として、やはり私は、今考えているのは本当に6校減、あの案でいうと坂城は残るといふか、違う学校になるということですよ。そうすると、5校減ですか。

そういうことが、それでいいのかという問題は、あれは5校減というのは、検討委員会では提起されていないわけですから、県のほうが出したのは、それもたたき台だという話ですので、それで本当にいいのかという問題は、大きな問題として、数字的な問題や将来展望も含めてあると思うんですよ。

そういうことも合わせて議論をして、5校減ということは決まっているのだと。だから、県が出した案が駄目なら、もう1校、5校を別にここでなんとしても対案出さなければ駄目だということではないというふうに私は個人的には思っているんです。

そういう議論も含めた、次回、具体的な、個別の候補案とも絡みながら話をそういうふうにしていくということで、もしその対案が出るとしたら個別な学校というのは先だというふうに思うし、さっき小山校長先生がおっしゃったように、やはり候補案の中で、どういう問題点があるのかというようなことを、議論していくしかないのかなと思うんで、減の数の問題も、やはりきちんと議論をしてほしいというふうに思います。

(中沢委員)

今日は、総合学科ということで、じっと黙っていたんですけど、そのうちに、多部制・単位制が出てくるかなと、こんな思いをしたわけでございます。

最近私のところへ、立科の皆さんからメッセージがあって、坂城の皆さまがこういう議論をするときには、全高校がどのように変えていくかという気持ちを持っていることそのものについては評価したいので、ぜひそういう高校もやってほしいというのがひとつです。

もうひとつは、坂城高校の全日制を存続してほしいという、坂城高校の生徒会からのメッセージが来ているわけでございます。それは、生徒会の担任の先生が、子どもたちがまとめたものだという中で、一番こう思うのは、本当に急な話で僕たちは驚いたと。とても悲しく感じていますと、こうっております。

そしてまた、私たちは校内だけでなく、地域を盛り上げようとして、坂城のもろもろのイベントに参加し、また清掃などもやってきております。地域と一体化するのが坂城高校だったと思います。それともうひとつは、こういった重要な問題が、私たちはじめ町の人にも、高校の先生方にも、意見を聞かず突然出てくるとは、これは残念でなりませんと、こんなお話があったもので、町長どうするかって言うから、「ええ、また、いつかの機会にその趣旨は、こういった委員会に伝えておく」と、こういうふうにお話したところでございます。

もうひとつは、私どもが進めていく中で、私なりに坂城高校というものは、普通科はぜひ残さなければいけないと。しかし、そういう特徴づくりの中では、いろいろひとつの提案だなど、単位制の多部制というものは提案だなど、こういうものを勉強していきたいなと、こんな思いもありました。

また数年前から、テクノセンターと一緒にあって、勉強することによって単位を取得できるように学校でも考えてくださいという提案もしておいたところでございます。町の坂城高校では、大体40%ぐらいの人たちが地域から通っているし、「これからどうなるんだ」という思いもあるようでございます。

そうした中で、学校自身が学校というものをどういうふうを考えていくのかなと、県教委と学校との関係は、例えば坂城を多部制・単位制にするんだったら、そういうことを重々学校のほうへもお話ししてあるのかなと。全体に多部制・単位制ということへの理解は、私以上に持っている方は、ほとんど地域にはいないという思いをするもので、そういったものをいろいろ知らせていくということも大事だなと思います。

それと多くの会の中で言われているのは、どうしたって多部制・単位制というものは長野市とか上田市とか、あるいはそういう数校あるところのひとつに位置付けるべきであって、1地域の1高校というところに配置するというのは乱暴な議論ではないかということもお話がありました。

今、いろいろの中で、同窓会が絶対反対ということと、もうひとつ、町長は推進委員から推進するために、多部制・単位制のことを高校教育課長さんにも来てもらって説明させたのかなという、裏の話まで出てくるような状況でもあるわけでございますので、もし坂城高校等が本当にそういうことで大事だということになれば、今まで論議した3つぐらいこういう高校が挙がりましたよ、そのうちの1つ目がこうで、2つ目がこうで、3つ目がこうと、総合して坂城高校をひとつのそういう位置付けにしましたよというぐらいの提案

がないと、ちょっと提案自身が乱暴すぎると、こんな思いもするわけでございます。

これからの過程の中で具体的に論議するならば、最初から多部制・単位制は独立だと決めてかかるよりも、そうでない方法も見つけられるのかどうか、あるいは委員長さんが言っている坂城ばかりでなくて、ひとつの分散型を考えていくことも方法ではないかというようなお話も皆さんからも出ておりますので、そういった面の県の考え方等を、より具体的丁寧に関回は説明してほしいなと、こんな思いでございます。

（中村委員長）

はい、中沢委員から以前にもお話いただいておりますので、候補案の詳しい説明というのは多分そういうことを皆さん要求されているというふうに思います。

（吉江高校教育課長）

ちょっとよろしいですか。

（中村委員長）

はい、事務局お願いします。

（吉江高校教育課長）

恐れ入ります。

前々からずっと申し上げている点で申し上げますと、かねてより、今も中沢委員さんからもお話がありましたように、急に出たというようなお話は承っております。それぞれの、学校なり、あるいは、地域なり、いろいろなところからそういうふうなお話を承っておりますが、反面、前々から申し上げておりますようにご理解いただきたい点は、私ども、今回のものが、イコール決定事項ということでお出ししたものではないと。そういう意味で、地域に事前にご相談をしてどうでしょうかというようなお話で、お出しするものではないものだというようなことは、まずはご理解いただきたいと思います。

その意味でこういうような委員会の中で、いろいろな議論を重ねていただきたいということですが、ただそこで、先ほどの、この第一推進委員会の次回以降の進め方と、それが果たしていいのかということで、ちょっとご検討いただきたいんですが、まずは、先ほど、中沢委員さんからお話がありました、例えば多部制・単位制をどのように設置するのがいいのか。あるいは、単数でやるのがいいのか、あるいは、分散するのがいいのかという議論は、これはある意味多部制・単位制を、この地域につくとする意味におきましても、根本にかかわる問題だと思っております。この根本にかかわる問題につきまして、委員さん方に、まず議論をいただいた上でないと、それから先には恐らく進まないのかなという気がしています。

例えば先ほど、たまたま次回具体的な説明をというなお話をいただいたわけなんですけど、私ども従来から、ここの委員会に限らずほかの委員会におきましても、今回お出しした資料以上のものというのは、あまりお話はしてきてまいりませんでした。その、ひとつの理由は、先ほど来申し上げておりますように、このもの自体が、いわゆる検討材料ということでご提案した内容なので、あまりこれを細かくご説明するのはいかがかというような面

もありまして、してこなかった次第です。それはもちろん説明をせよというなお話があれば今後そのような場面は、もちろん取らしていただくことといたしますが、その前の段階で、本日総合学科のほうについて議論いただき、また多部制・単位制は、前回もある程度以上の議論はいただいているわけなんですけれど、それをそのままどういう形で多部制・単位制は持っていくべきかというような議論を、まずしていただいたほうがいいのかと思います。

それと後は、仮に候補案につきまして細かい説明を申し上げるとしまして、それぞれの地域に個々の地域ごとに議論をしていただくのがいいのか、あるいは本日議論いただきました総合学科から議論していったほうがいいのかというようなことで考えていただくのか、その辺をでき得ればこの委員会におきましてお決めいただいた上で、また次回に向けて、私どもの資料の調整等をさせていただきたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

（中村委員長）

議論の進め方を毎回説明してきたつもりですが、全体的なシステムにかかわるところを議論いただいて、その上で次へ進めていくと。今日は、総合学科のデメリットに関しても少し考えておかなければいけないということで、だいぶ深い議論していただきました。

こういったことで、まだ漏れているところもあるかと思います。中高一貫とか、また多部制・単位制の配置に関しても、もう少し必要かなと思うのですが、それにしても全体的な議論は進めながら、ところどころに出てきているわけです。総合学科をどこにするかというふうなことです。配置に関して、長野市内の近いところに配置してもどうかというようなことも出てきていますし、やはりたたき台として示していただいた候補案に関して、少し触れていくのが議論を進めるひとつの段階かなという気がします。その中で、青木委員がご心配されている具体名を出せるのかどうかというのは、皆さん方でお考えいただくことになろうかと思います。

青木委員のお考えは、非公開でと考えていいのではないかと思います。そういうことも考えられるかもしれませんが、それはまだちょっと私は先かなというふうに思います。今ご提案いただいている候補案に関して、少し意見を出していただくというところがまず先だと思いますが、いかがでしょうか。

（宮本委員）

今、県教委からご説明があったように、大きく再編案の中で示されている、総合学科と多部制・単位制、そして学校数の減のことについて、大まかな形で導入するのか、メリットがあるのか、その方向で考えるのかということを議論して、その次にどの高校とかそういうふうに入ってきた段階で、さらに検討の仕方についてみんなで話し合ったらどうでしょうか。

委員長の判断でいいと思いますが、どうでしょう。

(中村委員長)

今日、資料として提案した、今まで出された意見の抜粋というのが、ある程度まとまりのあるところというふうに見ていただきたいんですが、この中で欠けているところを、今日また総合学科についてご議論をいただいたんですけど、今、宮本委員から言われた 3 つの点は、もう既にだいが議論されているというふうに思います。

再度言いますが、もちろん欠けているところもあると思います。本当は今日辺りからというふうに思っていたんですが、今日、まだ欠けている点を再度深めていただきましたので、こういうところがまた次回もあれば、それを議論しながらというふうに、ただ、周りをただ触っているだけではないかというご批判もありましたけれど、それがやはり、大事なことではないかなと、その後で具体的なものに入っていく。そのためには、やはり何かないといけない。候補案が、そのためのたたき台というふうに思いますので、ご理解願います。

今提案されている総合学科高校の配置の、その理由を、もう少し詳しいところを事務局から説明をいただく。あるいは、多部制・単位制の配置に関して説明いただく、それに対して再度言いますけれど、こちらのほうがいいのではないかと、こういう方針のほうがいいのではないかとすることを申し上げていく。あるいはまるっきり新しい高校のアイデアがあればご提案いただき、それについて議論していくというのが進め方というふうに思います。

(森野副委員長)

ちょっとすみません。

今のものに関連して、具体的に今回始まる最初にちょっとお聞きしたのですが、ジョイント校というか連携校というか、教員の配置の減というのも問題。これも含めて、やはりお願いしたいと思うのです。

そうすると5減なのか、あるいは、0.5と0.5を1にして、そうすると減4でいいのか、というようなところまで発展していくと思うのですが、できるだけそういう形で地域というもの残していただきたいと思います。

それから、よく言われますたたき台っていうのは、私はどうも、なんか遊ばれている感じなんですよね。新聞報道などでもそうですが、「高校再編たたき台」、もうタイトルが出ています。これはちょっとね。何でたたき台なんですか、たたかないで、もぐらたたきみたいなゲームなんじゃないかな。

だから、これひとつ改めていただきたいような気がいたします。

(吉江高校教育課長)

それにつきましては、実は、私は南信地域に説明会がございまして伺った折に、たたき台という表現は非常に失礼な表現だというようなご指摘をいただきましたとき、なるべく検討材料という言葉を使わせてはいただいているんですが、ただ正直申し上げて、いろんな場面でこの言葉を使われているのは事実でございます。

ただ、私も、基本的には、なるべく検討材料というふうな表現を使わせていただくようにしておりますので、そういう意味では誠に申し訳ございません。

(森野副委員長)

それと合わせて、「受け皿」という言葉ありますよね。なんか、これも変な話だともいます。申し訳ないですが、これもなんだか卑しいような、焼酎飲んでいるコップの受け皿、私はあれ思い出しちゃうのですよ。何かみみっちくすすっているというような感じで、これもすごく長野県の教育委員会ですから、これも、言葉としていかなものかなと、寂しく思っているのですが。

はい、どうもすみません。

(中村委員長)

はい、何か、特にありますでしょうか。

そろそろ時間ですので、第5回については、審議を中止させていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

今回は、事務局のほうから日程について説明いただきたいと思います。今回は、やはりこれは一律に議論をきちっと区切って、項目を一項目に絞って議論するというわけにはどうもいきませんので、今日のような形で、検討材料に関して、もし出てくれば、それに対して事務局から詳しい説明をいただく。

またこの辺がまだ、検討が甘いのではないかと、審議が浅いのではないかとということが、ご提案があればそれについてまた深めていくという形をとっていききたいと思います。

そのようでよろしいでしょうか。

それでは次回について、日程についての説明をお願いします。

(三澤教育支援主事)

今回の日程ですが、前回のときにもお願いいたしました、8月25日の午前中で予定をお願いしたいと思っております。

また、委員さんの中から、ご都合が悪い等出てまいりましたら、再度調整させていただくような形でお願いしたいと思います。

(中村委員長)

ありがとうございました。

それではまた地域の情報、あるいは各お立場での得られた情報等もまた、次回に紹介していただきたいと思いますので、資料を準備いただければ、事務局のほうでコピーしていただけたと思いますので、よろしくお願いいたします。

それではこれもちまして、第5回の推進委員会を終了させていただきます。

本日は、お疲れさまでした。